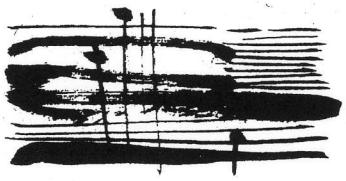
展望



山元　眞

気になる権威の世界

まず、イエスのことば…

「そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。『あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕(しもべ)になりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献(ささ)げるために来たのと同じように』」(マタイ20・25―28)。「あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」(同23・11―12)。イエスの弟子たちが、「だれがいちばん偉いか議論していたとき、次のように言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」(マルコ9・33―35)。

人は、だれがいちばん「偉い」かということが気になるようだ。イエスの弟子たちもそうだった。あまりにも気にするので、イエスは先のようなことばを言われたのである。もともと「だれが偉いか」なんていうことは問題ではない。イエスは、ただ「仕えなさい」と言われた。神であるイエスご自身が私たちに仕えてくださったのである。

神父は「偉い」のか?

異論はあるかもしれないが、最近、「神父様」という呼び方に独特な響きを感じることがある。幼稚園の子どもたちに園長を「神父様」と呼ばせ、職員にも「神父様」と呼ばせる。それに慣れてしまっている職員は園外でも平気で園長を「神父様」と呼ぶ。場違いの感じがするし、その響きに、呼ぶ方も呼ばれる方も何かしら「偉さ」を感じてしまうと思うのは私だけだろうか。ある人は、それが福音宣教につながると言うが、ピンと来ない。教会内でも、この呼び方は何となく違和感がある。

仕える姿勢

かつては、このように感じたことはなかった。自分も当然のように「神父様」と尊敬をもって呼んでいた。それは、おそらく司祭に「仕える姿」を見ることができていたからだと思う。最近、違和感を覚えるようになったのは、奉仕する姿が薄らいできたからかもしれない。

司祭職は、本来の意味でのサービス業だと思う。サービスの語源は「仕える」こと。それが、いつの間にか仕えられる生き方に変わり、それが当然のようになっている。人々と普通に対話ができなくなり、耳を傾けることなく、上から下へものを言うことが多いのではないか。「べき論」を唱え、ひたすら、自分について来ることを求める。教会委員会などの教会の組織にしても中心は司祭であり、広く信徒の意見や悩みに耳を傾けることはない。信徒は多くの場合、司祭に仕えることが求められている。神の名の下に権威を示すが、それは先に挙げたイエスのことばを反映していない。神の前では人としては皆、平等であり、たとえ司祭が特別な使命を頂いているとしても、それは人を従わせる権威ではなくて、あくまで仕える権威であることを忘れてはならない。

信徒は耐えている?

信徒の声を聞くと、彼らがどんなに耐えているかが分かる。司祭に対して素直に、自然にものが言えない。何かを言うと批判、非難していると思われてしまう。ただ、黙って従う。無言の従順が求められていることに耐えられないでいるが、耐えている。信徒の声を聞くと、彼らがどんなに教会のことを思い、教会の現在と未来について心配しているかが分かる。しかし、だれも本音を語ろうとはしない。教会の「展望」は暗いと言う人もいる。しかし、司祭がもっと信徒と共に歩むならば、そこに明るい希望がある。聖霊はいわゆる聖職者だけに働いているのではない、という常識はどこにいったのだろうか。

(福岡教区司祭)